

米・コメ・こめ —米を考える—

富山県農村医学研究会会長 豊田 文一

昭和十九年二月、私どもの防衛していた中部太平洋トラック島は、米軍の度重なる爆撃で壊滅状態であった。糧食の補給は絶え、数ヶ月も米の飯を口にしない。それで椰子林を掘り起し、サツマ芋畑を作って、それで生命をつないだが、何分にも一日千カロリーで、平常食の半、兵員に栄養失調が増加し、燈火の消える如く死亡者がふえる。茶碗にもった暖かいご飯のふくよかさを夢にまで見る。

その頃（20年3月頃と記憶しているが）師団では稲作のことを考えたらしく、創意工夫をこらして稲を作れという指示があり、種粃が配給された。どうして粃があったか。これには一つの挿話がある。師団の経理部のある兵隊が、決戦用に貯蔵してある白米から辛苦して粃を拾い出した。“米の中の粃”という諺があるが、精白された米のなかには粃が極めて稀である。これを集めて稲田を作り、配給しうる種粃の生産ができた。

さて少量の粃をもらったがこれをどうして粃にするか、私どもは野戦病院であるが、農家出身の兵士と色々話しあった。幸い炊事場の近くに細い水流がきている。しかし大小多数の岩石がジャングルのなかにころがって

いる。これを平にするには、体力の消耗しているものには筆紙につくし難い重労働である。それでもバルなどを駆使して大体百坪位、山の方から土を運び田圃らしいもののできた。粃は直播きにする。熱帯は生育が早く、約3～4ヶ月で収穫ができる。与えられた種粃は芽を出し、すくすくのびる。肥料は肥溜の糞尿をくみとりばらまく。稲の花が咲き、稲の香が猫額の水田にただよう。結実たわわと、稲の穂がたれる。八月十五日のお盆に一口ずつでも全員新米が口にできると、ほのかな喜びもわいてくる。予想通り8月15日収穫。粃すりも手作業、米はお盆に間に合った。

しかし師団への命令受領者が帰ってきて、師団はお通夜の有様だったと伝える。われわれが敗戦を知ったのは翌十六日、戦闘停止の命令が出された。

それでも昭和20年8月15日、一口の米飯が皿の底にこびりついていた。

日本人は古来より瑞穂の国と呼ばれるように、米によって生き、これによって生命の活力を蓄えてきた。将来に向ってもこの考えを捨ててはならない。

米作農家よ、頑張ってもらいたい。